

## 2020年度 関係者評価委員会のまとめ

2020.10.19

2020年度 学校関係者評価委員会のまとめ 2020年9月24日(木)13:00~14:45

(2019年度学校自己評価の形式・内容について、事前に資料をお渡しし、会議までに目を通して来ていただく。)

項目1. ミッションステートメント、育むべき生徒像については、既に共有している学院全体の理念である。

項目2. 中期計画については、2014~2019の学院のⅠ期及びⅡ期中期計画及び2018年度の事業計画を簡潔にまとめたもの。アンケートは、生徒、保護者対象2019年12月実施、教職員対象2020年2月実施で、それぞれ別の内容で行った。

項目3. 2019年度の取り組み内容および自己評価については、2019年度事業計画の具体的な取り組みについて教職員アンケートの内容を評価指標に定め、アンケート結果を元にして自己評価を行った。

9/24当日、有澤慎一氏を委員長、及び司会者として選出し、アンケート結果について2019年度学校自己評価の内容を吟味しながら、質問、意見交換がなされ、質問には管理職がその都度返答する形で、本委員会が進められた。

<生徒アンケートの項目>

### 【宗教教育・解放(人権)教育について】

・宗教教育に関して中学入学当初に見られる肯定的な意見が、中学2年生で一度下がり、その後学年が上がるにつれて上昇していくものだが、今回高校1年生(現高校2年生)が10ポイントも上がったことは興味深い。昨年度の12月の時点なので現況のコロナ禍以前の状況なのだが、その頃から生徒達は何かしらの生きづらさのなかで宗教的な救いを求めることが増えてきていたのかも知れない。へール会の委員の方が、「娘がことあるごとに、『神様のお導き、、、』と口にするようになった。」と発言されたことは象徴的であった。

それは、宗教教育活動において-教員自身が工夫を凝らしたと振り返っているように-、受動的な活動に終始するのではなく能動的な作業を取り入れるように工夫、改善を図ったことによる成果かもしれない。例えば、生徒が積極的に取り組めるよう、活動の形態を必要に応じて、生徒からのレスポンスを求めるもの、ビジュアルを活用したものへと移行していることなどが挙げられる。

また解放(人権)教育への肯定的な意見も全体的に高いことは、違った国籍を持つ生徒が年々増える本校の現状の中で、「違いを認める」ことを生徒、教員が認識しつつ人権教育活動に取り組んでいる成果とも考えられる。

### 【生徒指導について】

・生徒達自身が「社会のマナーは身につけている」と回答している率が高いことはうれしいことだが、客観的に見ると指導、改善していかなければならない点はまだまだある。特に「スカート丈の短さが心配である」との意見が席上で出され、以前は定期的に行ってきた校門チェックなど、保護者から理解を得られるような指導が必要であると感じた。「スカート丈」は、痴漢・盗撮の被害とも関係が深く、身だしなみと同時に自分の身を守るための重要な指導である。

・生活指導上の問題として、生徒の受ける迷惑行為について、昨今は痴漢被害だけでなく、盗撮被害の件数が増えていることをお伝えした。これらについては生徒のリスクの意識が低く、無防備に通学している者も多い。特に盗撮は被害者意識が低くなりがちなので、このことに関する注意喚起を身だしなみ指導と併せて行っていく必要がある。

### 【学校行事について】

・例年、生徒たちは行事に前向きに取り組んでいるので、今回肯定的なポイントが下がっている理由への質問があった。これは、集団における個々の関係性によるところが大きいと考えられる。肯定的ポイントが下がっている学年は、直近の行事である文化祭における人間関係の難しさがアンケートに影響したのではないかと推測される。その陰には、頻繁に利用するメールやSNSでの行き違いや、リテラシー能力の不足による問題がある。また、直接的なコミュニケーションの力の不足から起こる関係性のこじれが、以前にも増して水面下で発生していることが、このような問題を生む一つの要因ではないかと考える。

礼拝の項でも述べたことと重複するが、行事についても、より生徒が主体的に取り組めるよう、また、これらの行事を通して他者との直接的なコミュニケーション力を養えるよう、各行事のあり方を見直していきたい。

### 【学校生活について】

・生徒たちが概ね「学校生活が充実している」と回答としていることは何よりのことではあるが、悩みが生じた際にしっかりと教員側が受け止めていくことが重要であろうと考える。これについては、昨年度も同じご意見があったが、「教員に相談する機会が減ってきているのではないか」という危惧である。その要因として、教員が日々の業務に追われ、生徒との何気ない会話を交わすゆとりを失っているのではないかと、また生徒たちがそのような教員の忙しさを慮って相談することを遠慮している場合も多いのではないかとのご意見もいただく。校内教育相談室の利用率が上がってきていることも、日頃の教員との接する機会の不足が遠因とも考えられる。

・また、クラブ活動について、顧問の指導出来る内容や範囲が限られているクラブにおいては、生徒たちの充実感が得にくいと感じている生徒もいるようである。クラブ顧問制度は教員の働き方改革と併せて考えていくべき課題であり、社会全体の学校活動における課題として検討されつつある。生徒、保護者の協力を得ながら方向性を探っていく必要がある。

・生徒の生活面のマナーについて、生徒の「自分たちはできている」との回答は一定評価できるが、クレームや注意を受けた時、幼さから自分たちの言動を顧みず、「クレームをつける周囲が悪い」という意識を持つ場合も見受けられる。生徒たちが周囲のことを考えて自主的に行動できるよう、電車、自転車通学途上のマナーなどソーシャルスキル向上に向けての指導を続けていきたい。

・関係者委員の方からは、「退学する生徒の数が少しずつ増えてきているようで、残念である。大阪女学院という環境を大切にしてみんなに卒業してもらいたい。」との意見があった。学校としても最大限努力しながら、卒業まで生徒に寄り添い、支援していく姿勢は変わりなくもっているが、様々な事情の中で、生徒・保護者が今後の生き方に照らして、学校を転校、退学したいと考える場合があり、その決心を応援することもまた大切であることを説明した。

### 【進路指導について】

・この項も、2019年度の振り返りというよりは、現在進行形の今年度の学校生活についての話題となった。この4月から学校休校になってほぼ2か月間リモートでの学習を余儀なくされた中で、生徒たちの進路志望に例年とは違った傾向もうかがえる。については、学校は進路に対する不安を払拭するために、心のケアも含めてその指導をお願いしたいとのご意見をいただいた。オンラインが一気に進んだこともあって、国内外問わず普段なら目にもすることもない遠方の学校のオープンキャンパスに参加できたとの報告も受けた。

・2019年度から、通常の進路指導に加えて、海外進路についての指導・サポートを充実させるために専任担当者を置いた。担当者の様々な試みによって、海外進路を考える生徒たちの大きな助けとなっていると評価を受けている。

#### 【国際理解教育について】

- ・これまでは主に留学生受け入れが中心となってきた活動であるが、外国籍の人と触れ合うことが特別なことではなくなりつつある。次のステージの国際理解教育を行っていくべきではないかのご意見をいただく。数多くの卒業生が国際的に活躍していることから、そのような卒業生との交流プログラムを充実させていくことも考えられる。すでに、昨年度配置した海外進路担当者が海外に進学した卒業生と積極的につながりを持ち、興味関心のある在校生向けのオンライン会談を実施するなどさまざまな試みが行われている。
- ・また席上では、国際学部を持つ大阪女学院大学・短期大学との連携も利用できるのではとのご意見もいただいた。これも昨年度、高大連携プログラムとして、大学の一つの授業に高校生が参加するというプログラムが実現したこと、模擬国連の全国大会に出場する高校生の指導を大学の先生方に依頼したこと、海外進学についても大学のサポートを受けていることなどを紹介した。今年度（2020年度）はコロナ禍の影響で計画していたことが頓挫している状態であるが、この連携についてもより充実させていきたい。
- ・このような意見から、2020年度アンケートからはアンケートの質問内容の変更を行ってはどうかのご意見も頂く。

#### 【授業評価について】

- ・昨年度より授業評価のポイントは少し上向きになった。このことは、各担当者の、生徒の主体的で対話的、及び深い学びのスタイルを意識した授業展開を意識した取り組みの成果といえよう。しかし、まだまだ不十分であるので、観点別評価や形成的評価の意識付けと共に、さらに発展させていきたい。  
また、昨年度からの課題であるが、このアンケート形式そのものも、一斉授業的なものを前提とした問いかけとなっていることが問題であり、質問内容の見直しが必要であるとの意見も頂いたので、アンケートの見直しを考えたい。
- ・また、関係者委員の方から、放課後などに勉強のことについて先生に質問したくても、今は忙しいからということではなかなかその時間をとってもらえない、あるいは生徒が遠慮を言い出しにくい環境にあるのではないかとのご指摘も頂いた。教師の働き方の観点と併せて生徒の教育環境の観点からの見直しが喫緊の課題であろうと思われる。
- ・この項もまた、今年度（2020年度）の話になってしまい、リモート以降対面での授業形態になってからも、宿題がものすごく多く、家庭学習時間の範囲では到底終わらなく、しんどい思いをしているとのご指摘も頂く。これは、新学習指導要領への変更を見据えて、形成的評価の充実を図っている最中に起きている想定内の課題だと考えられる。教員には適正な家庭学習量との呼びかけを行っているが、現状では、学校全体で全教科を見渡したチェック機能がないことが問題点だろう。

#### <教職員のアンケートの項目>

- ・教職員の振り返りはいつも厳しい結果になる。これは目標値にどの程度達成させられたかという評価なので、目標に向けての意識が高い教職員であるがゆえにこのような回答結果となるのだろう。
- ・特にマナー面や授業での生徒主体の指導についてはまだまだ教職員の自己評価が低く、学校全体としての取り組みを前面に出して行っていきたい。

#### <保護者アンケートの項目>

- ・今席上では特にご意見が出なかった。

#### <まとめとして>

- ・今年度（2020年度）が4月からの教育活動がコロナ禍により制約が課せられたこともあり、今関係者委員会でも、本来ならば2019年度の教育活動の振り返りとすべきところ、話の議題が今年度の取り組み状況報告になってしまいがちであった。それほど、現況が今までとは全く違う活動になっているということである。  
そこで、今年度2020年度アンケートは、生徒・保護者・教員とも、質問内容を変えるべきかを話し合ったが、結論的には、同じ質問をすることで、零年度との意識の差を浮かび上がらせていくとの考えから、従来の質問に加えた形のアンケートを作成することとした。  
特に授業についての項で、1学期の半分がリモートであったことへの質問や、行事が大きく縮小していることについての質問については興味深いと思われる。

毎年のことではあるが、世の中の変化がめまぐるしい折から、生徒も教職員も余裕がない状況に追い込まれていく危険性を覚える。そのような中で、このように学校関係者評価委員会のメンバーの皆様が、学校の取り組みに深い関心を示し、愛情をもって、生徒、保護者、教職員を見守り支えてくださっていることを心強く感じた。